政サイドのみの発想から物事が決まってしまう良い例だと思います。

又立会い演説会が廃止になったために、各候補者の政策の違いが鮮明に浮かびあがらず、大切な情報や政策が選挙民に伝わらず、各候補者の主張の違いが分かりにくいと言うことは大きな問題です。政策を訴えるのは、法定ビラの配布と駅前等の演説と選挙カーでの連呼で、一週間しかないわけです。しかも法定ビラには、候補者の名前を書くことが禁止され、候補者を推薦する政治団体、今回は「21世紀の中野を作る会」の名前と選挙公約しか書けませんのでビラを何千枚配ろうが、一番重要な候補者の名前が伝わらないのです。

選挙民は選挙カーでの連呼とビラの選挙公約だけでは各候補者の違いが分からず、皆同じようなことを言っていると感じて余計投票しに行かなくなってしまうわけです。立会い演説会を復活させ、各候補者が自分の選挙公約を説明し選挙民からの質問に答える中で、各候補者の違いが鮮明に分かり、今何が一番問題なのかが分かるようにすべきです。

今の公職選挙法では、現職に圧倒的に有利に働き、組織も金も無い市民派の新人が現職に対抗して改革を叫んで立候補しても、その声は選挙民の元に充分届かないのが現実なのです。　　（続く）

天皇陛下御訪英の前に

世田谷区　井上小夜子（80才）

私は政治家が外国へ行く度に、いつもひやひやする。日本に責任の無い事を謝らせられはしないか？へんな筋違いの約束をさせられないだろうか？と。不幸にして私の心配が現実のものになるのがたびたびある。でもせめて天皇陛下にだけはそんなことをして頂きたくない。天皇陛下は近く訪英される。イギリスでは日本兵の捕虜虐待を騒ぎ立てているが、それではイギリス兵は日本兵に何をしたか？泰緬鉄道の建設はたしかに大変な工事だったろう。イギリス兵を殴って働かせたかも知れない。

しかし、日本兵もイギリス兵同様に食糧は乏しく、彼らと一緒に働いていた筈である。でもイギリスの捕虜虐待はそんな生やさしいものではない。彼ら白人は我々東洋人を家畜以下と見ており、普通言われる捕虜虐待の他に凄惨ななぶり殺しや人間の尊厳を傷つけるようなことを、平然と行っている。

会田雄次著「アーロン収容所」（中公新書）を読めば、それがよく分かる。著者が長年躊躇したあげく、やっと書かれたものである。

天皇は御訪英の前に、是非、この本を読んで頂きたい。天皇のおつきの人たちも随行する記者たちにも必ず読んで頂きたい。イギリスが紳士の国などでない事がよくわかる。新書版でページ数もそんなに多くないので、誰にでも簡単に読める。そういう基礎知識をみんなで持って、イギリスへ行っていただきたい。間違っても捕虜虐待で謝らないでほしい。捕虜虐待ではこっちで謝ってもらわなければならない。

戦中に生きていた者には忘れない各国の不法行為、ソ連の中立条約違反の満州、千島、樺太への侵略、そこに住む住民への虐待、十年以上に及ぶ捕虜の抑留とその結果の死亡。中国の通州事件、アメリカが投降した捕虜を全部射殺したとか、・・。日本人は草食民族なのでそんなひどいことはしていないと思う。

今度の天皇の御訪英を機会に歴史的な事実を徹底的に調べ、謝るべきものは謝っても、こっちに責任のないことをむやみに謝っては絶対にいけない。それは日本人の心を傷つけ、子供達に日本人としての誇りを失わせることになる。なお、この「アーロン収容所」の英訳では出ているそうであるが、日本で出ているなら

この際、増刷してイギリスに売り込みたいし、絶版になっているのなら新たに翻訳するなりして、多くのイギリス人に読ませたい。この件については著者を説得して、この本を世に出した中央公論社にでも、お骨折り頂けないだろうか？

それから連合軍に虐待を受けた人は匿名でもよいから、事実を申し出て下さらないだろうか。この件については産経新聞社にご尽力頂きたい。

「大臣」（菅直人著）買って、読みましょう！！

㈶仏教振興財団理事　港区　井上信一（80才）

平成維新の会に入れて頂いたのは、私が、銀行生活を終わった頃、花王の会長丸田芳郎氏の熱心なお勧めによるものだった。氏の仏教精神から強い感銘を頂いていた私は一も二もなく加入、その後、大前前会長の辞任（平成維新の会の解散）、その他の紆余曲折は良く判らぬまま、今の皆様の集りが初志の正統であると信じている。

先ごろ治田さんより菅直人氏を総理にという世論を興そうとの呼び掛けをいただき、中曽根康弘氏が首相公選を熱烈に叫びつつ、総理になるや一言も語らなくなったことを想い出した。

偶々、新聞社の友人から岩波新書の菅直人著「大臣」を紹介され、一読、大きなヒントを受けた。国会議員の大半が大臣になることが大切で、国政の上に何を行わんとするかは二の次であれば、担当省務のイロハが身につく頃には内閣交代となってしまう実情もよく判った。本書の最終部「1996年12月6日の衆議院予算委員会での質問より（国会議事録）」を読むだけで、菅直人氏が官僚独善を排して内閣及び総理が市民の結集された要望を国政に実現することがいかに困難か、しかし、十分に可能であることを示そうとする熱情と勉強とを読み取ることができる。

この“「大臣」を読もう！”というキャンペーンを起こし、3ヶ月位ごとに販売数を公表することが出来たならその数はジャーナリズムの関心の的となること間違いない。あとは、言う必要もあるまい。

会員皆様の御賛同をお願いいたします。